五校寮歌　「武夫原頭に草燃えて」－東京帝国大学在学先輩寄贈之歌

作詞　恵利武（明治 38 年）
作曲　東京音楽学校

【巻頭言】

仰げば星斗爛煥として
永遠の真理を囁く
頭を巡らせば蘇山遠々として
我等若人の情熱をそそる
天地の恵み豊かなる肥後の一角
立山の麓白川が畔
これぞ我等五高健児の地なり
いざや舞わんかな狂わんかな唄わんかな
我等が剛毅木訥の調べを

武夫原頭に草萌えて

一(Eins) 二(Zwei) 三(Drei)　　そーれっ！

一、武夫原頭に草萌えて　　花の香甘く夢に入り
　　龍田の山に秋逝いて　　雁が音遠き月影に
　　高く聳ゆる三寮の　　歴史やうつる十四年
二、それ西海の一聖地　　濁世の波をとはにせき
　　健児が胸に青春の　　意気や溢るる五高魂
　　その剛健の質なりて　　玲瓏てらす人の道
三、時潮のめぐりたゆみなく　移りてここに十年の
　　思や狂ふ胡北の地　　断雲乱れ飛ぶ所
　　斬魔の剣音さえて　　スラブの末路今ぞ見る
四、時艱にして義を思ひ　　塵世に節を偲ぶかな
　　ああ新興の気を負ひて　　浮華の巷にわれ立てば
　　思は馳する木訥の　　流風薫る銀杏城
五、さらば我友叫ばずや　　時と人とを諭すべく
　　見よ龍南に一道の　　正気ありてぞ日の本の
　　青年の名に力あり　　二十世紀に光あり